様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 4 月 19 日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2008～2009
課題番号：20791800
研究課題名（和文）グループ回想法を実施したケアスタッフへの効果
研究課題名（英文）Effectiveness for elderly care staff who had conducted Group Reminiscence

研究代表者
内野　聖子（UCHINO SEIKO）
埼玉医科大学・保健医療学部看護学科・講師
研究者番号：00348096

研究成果の概要（和文）：
グループ回想法を実施した体験がある者を対象にして半構成的面接を実施した。回想法実施体験を通じてもたらされた高齢者ケアへの変化としては、高齢者への関わり方などの高齢者ケアや回想法実施場面において、さらに、日常生活上にも影響をもたらしていることが分かった。また、回想法実施後の回想法実践能力としては、回想法が確実に理解されていっているとともに実践能力が向上し、回想法の難しさを実感できるようになったことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
We conducted semi-structured interviews of people who have performed group reminiscence therapy. As an effect of the therapy on elderly care, we learnt that it influenced the respondents' attitudes to elderly people not only during therapy but also in daily life. We also discovered that, as the respondents gained a deeper understanding of reminiscence therapy through practice, their skill to perform it improved along with their realization of the difficulty to perform it effectively.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学　地域・老年看護学
キーワード：老年看護学

１．研究開始当初の背景

我が国の少子高齢化社会の中で、認知症への対応が問題になっている。現状として、要介護者のうち、施設在所者で認知症（認知症高齢者の日常生活自立度判定基準によるランクⅢ以上）のある者の割合は半数を占めている。さらに、認知症の重症化に伴う BPSD の妄想、幻覚、異常行動が増加している。また、虐待されている高齢者の 8 割に認知症があることが報告されている。

認知症への対応を検討することは急務であり、「2015 年の高齢者介護」の中で認知症ケアをモデルとして新しいケアシステムを確立することが必要であるとされている。また、「認知症ケアモデル」を構築していくために尊厳の保持を基本理念とした介護に携わる人材養成における専門性の向上に重点がおかれている。よって、有効な認知症ケア方法の確立とケアを提供できる人材の育成は、解決すべき重要な課題である。

認知症高齢者へのケアが困難であるといわれており、認知症高齢者が入院・入居する老人保健施設では、高い燃え尽き状態にある看護職員が 40%を占めているという調査結果であった。これまでに、仕事上のストレスやバーンアウトの関連要因として感情的な共感、上司や同僚との関係、高齢者との関わりなどが報告されているが、確立した効果的な対処方法は報告されていない。

認知症高齢者への取り組みの一つとして、回想法や音楽療法等の非薬物療法が行われている。回想法は 1960 年初頭に R. N. Butler により提唱された。この手法は治療的意義が示されており、認知症の有無にかかわらず幅広い対象に実施されている。回想法はリアリティーオリエンテーション等の類似する非薬物療法と比較され、それらの違いが明確になりつつある。認知症高齢者等における回想法の臨床的効果、心理的機能への効果や教育的効果の側面から研究が報告されている。

高齢者福祉施設では、業務の過酷さや賃金の安さなどから、バーンアウトや職員の離職が問題となっている。それらを解決する術を探索する中で、回想法に参加したケアスタッフは、ケアプランに生かすことができる基礎的な情報を入手でき、仕事の意欲が増す、個別の高齢者に即したケアプランのための基礎的情報が得られると言われていることから、研究代表者は回想法に着目している。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下の 2 点である。

(1)施設に入所している認知症高齢者を対象にしたグループ回想法を実施したケアスタッフへのインタビューを行い、ケアスタッフ実施による高齢者ケアへの効果、継続的な回想法を可能にする実施環境について明らかにする。

(2)回想法の実施体験および研修会講師の経験がある者にグループインタビューを行い、回想法により向上したと考えられる回想法実践能力の指標作成のための示唆を得る。

３．研究の方法

＜研究の目的(1)について＞

(1)対象者

以下の条件を満たす者を対象者とした。

①回想法トレーナー養成講座を受講している（回想法に関する研修会含む）。

②高齢者が入居している施設で勤務している。

③グループ回想法を 4 回以上実施したことがある。そのグループ回想法の参加者には認知症高齢者が含まれている。

(2)実施時期：平成 21 年 1 月から 2 月である。

(3)実施場所：高齢者が入居している関東圏内の高齢者福祉施設内の一室

(4)実施方法

①面接の実施方法

1 人につき 1 回、1 時間程度の個別の半構成的面接を実施する。面接の際、協力者の了解を得た上で、IC レコーダーに録音する。

②面接内容

1)基本属性

2)回想法への関心および体験

3)回想法実施後のコミュニケーションケアの変化

4)回想法実施後の高齢者への見方の変化

5)回想法実施後の高齢者ケアの変化

6)回想法を継続することの困難および困難への対処

(5)分析方法

録音されたインタビュー内容の逐語録を

作成して、分析結果について、質的記述的分析を行う。「回想法実施後のケアスタッフの変化」に関連する文章を抽出し、それをコード化し、意味内容の類似性に基づきカテゴリ化する。また、老年看護学の専門家から協力を得ながら分析を行う。

(6)倫理的配慮

ケアスタッフに対して研究の目的・方法、自由参加、不参加でも不利益がないこと、匿名性の遵守、データ管理の徹底、秘密の厳守、研究終了後データは破棄されることを口頭と文書で説明し、同意書により承諾を得た。また、埼玉医科大学倫理審査委員会から承認を得た上で、研究施設の倫理審査委員会に相当する会議にて研究の承認を受けて行った。

＜研究の目的(2)について＞

(1)対象者

以下の条件を満たす者を対象者とした。

①グループ回想法を 1 クール（8 回）以上実施したことがある。

② 回想法トレーナー養成講座の講師をした経験がある（回想法に関する研修会含む)。

(2)実施時期

平成 22 年 1 月 17 日および 2 月 6 日に実施した。11 人（6 人グループと 5 人グループの 2 グループ）に対して 1 グループにつき 1 時間 30 分程度のグループインタビューを実施した。

(3)実施場所：対象者の内 1 人が勤務する高齢者福祉施設内の一室

(4)グループインタビューの実施方法

①実施方法

1 回につき、1 時間 30 分程度のグループインタビューを実施する。インタビューの際、協力者の了解を得た上で、ビデオで録画し、IC レコーダーで録音する。

②インタビュー内容

1)基本属性

2)回想法へのこれまでの関わり

3)回想法の研修会などの教育的関わり

4)回想法実施体験を通じてもたらされた回想法で発揮されている力

(5)分析方法

録音されたインタビュー内容の逐語録を作成して、分析結果について、質的記述的分析を行う。「回想法実践能力」に関連する文章を抽出し、それをコード化し、意味内容の類似性に基づきカテゴリ化する。また、老年看護学の専門家から協力を得ながら分析を行う。

(6)倫理的配慮

ケアスタッフに対して研究の目的・方法、自由参加、不参加でも不利益がないこと、匿名性の遵守、データ管理の徹底、秘密の厳守、研究終了後データは破棄されることを口頭と文書で説明し、同意書により承諾を得た。また、埼玉医科大学倫理審査委員会から承認を得た上で、研究施設の倫理審査委員会に相当する会議にて研究の承認を受けて行った。

４．研究成果

＜研究の目的(1)について＞

高齢者ケアの変化については、23 人から協力を得られた。面接時間は 31～79 分であり、平均時間は 50.6 分（SD±13.2）であった。

年齢は 30 歳代 10 人、20 歳代 6 人、50 歳代 5 人、40 歳代 1 人、60 歳代 1 人であった。性別は女性 19 人、男性 4 人、職種は看護職 4 人、介護職 19 人であった。

また、グループ回想法実施回数は、4-10 回が 11 人、11-20 回が 4 人、21-30 回が 3 人、31-50 回が 2 人、50 回以上が 3 人であった。

その結果、カテゴリとして【対象に合わせた高齢者ケア方法の工夫】、【回想法実施場面での関わりの工夫】、【ケア場面での自分自身の変化】の 3 点が抽出された。回想法で得られたことが高齢者ケアに生かされ、さらに仕事の場で自分を支えるものとなっていることが分かった。継続的な回想法実施を促進する条件として、【回想法で得たことと高齢者ケアのつながり】、【スタッフの意欲向上】、【回想法を継続するための体制作り】の 3 点、回想法の継続を困難にする条件としては【負担感軽減の大変さ】、【効果的かつ安全に回想法を行うことの難しさ】の 2 点が抽出された。促進する条件を整えていくとともに、困難条件を軽減していくことの必要性が示されたと考える。

＜研究の目的(2)について＞

グループ回想法実施における発揮された力については、11 人から協力が得られた。年齢は 20 歳代 2 人、30 歳代 2 人、40 歳代 1 人、50 歳代 2 人、60 歳代 4 人、であった。性別は女性 8 人、男性 3 人、職種は看護職 2 人、介護職 9 人であった。

その結果、カテゴリとして【回想法に関心を高めるように伝達できるようになったこと】、【回想法の実施方法について正しく伝達できるようになったこと】、【回想法を円滑に実施できるようになったこと】、【回想法の価値を継続的に理解するようになったこと】、【高齢者ケア実践能力が向上したと実感し

ていること】、【回想法実施者の意欲を高める方法が分かるようになったこと】、【回想法を正しく伝達することの難しさを実感していること】、【参加高齢者に適した実施方法を選択することの難しさを実感していること】、【効果の把握と高齢者ケアへの活用の難しさを実感していること】の 9 点が抽出された。

回想法実践の場でできるようになってきたこととともに、回想法の難しさを実感できるようになったことは、適切な回想法実践や正しい回想法の理解につながっていると考えられる。さらに分析を具体的に進めることによって、回想法実践能力指標作成につながると考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 3 件）

①内野聖子，浅川典子，橋本志麻子，三好理恵：看護職者へのインタビューから得られたグループ回想法の継続的実施の促進・困難条件. 第 29 回日本看護科学会, 340, 千葉（2009 年 11 月 27 日）.

②内野聖子，浅川典子，橋本志麻子，三好理恵：グループ回想法実施後の高齢者ケア実践の変化～回想法を 4 回以上実施したケアスタッフにインタビューを行って～. 第 10 回日本認知症ケア学会，301，東京（2009 年 11 月 1 日）.

③ 内野聖子，浅川典子，橋本志麻子，三好理恵：グループ回想法実施後の高齢者ケア実践の変化～看護職者へのインタビュー結果から～. 第 14 回日本老年看護学会，278，札幌（2009 年 9 月 27 日）.

６．研究組織

(1)研究代表者

内野　聖子（UCHINO SEIKO）

埼玉医科大学・保健医療学部・講師

研究者番号：00348096

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし